

## ザンビアに暮らして「農業から見たザンビア」

ザンビア国農業畜産省 農業・農村開発アドバイザー 野坂 治郎

3年間に亘るザンビア生活がもう少しで終わろうとしています。長かったようでもあり、短かったようでもあり、海外駐在を終える時には不思議といつも同じように感じます。私のアフリカ生活は約23年になりましたが、ザンビアはケニア(3回)、タンザニア(1回)に続き3番目の駐在国です。今回は1年の任期で赴任し、2回の任期延長を経て計3年のザンビア滞在となりました。

私は国際協力機構(JICA)から派遣された専門家で、今回の仕事はザンビア国農業畜産省のアドバイザーです。本省内の政策・計画局に配属され、農業セクターの政策・計画立案に対するアドバイスや日々の業務を通じたスタッフの人材育成支援、日本がJICAを通じて実施している各種技術協力プロジェクトと農業畜産省の連携促進、新しい支援活動の検討・促進、他国ドナーとの連携や情報共有等が主な業務です。今回はザンビアを去るに辺り、農業政策の専門家から見たザンビアを少しご紹介してみたいと思います。

東アフリカでの経験が長い私の目から見ると、赴任当時この国に対して若干の違和感がありました。ルサカ空港に降り立つ直前、飛行機の外を見るとそこには大きなセンターピボットが連なっているのが見えます。センターピボットというのは、大規模な灌漑施設で幾つものスプリンクラーが連なったパイプが円を描いてその内側の作物に自動で灌漑する施設で、アメリカのような国では一般的ですが、起伏の少ない地形が必要で大きいものでは直径400mにもなりますので、日本では先ず見かけられない風景です。ケニアでも数か所でしか見た記憶が



ルサカ空港近くのセンターピボット



ルサカにはこういうモールが幾つもあります

ありませんが、その円が幾つも続く光景は圧巻で、どう見ても農業大国に見えます。ザンビアの首都ルサカは比較的小さな街ですが、そこには幾つもの大型ショッピングモールがありモールには輸入雑貨や輸入食材が溢れ沢山のザンビアの人達が買い物を楽しんでいます。他の東南部アフリカ諸国と同様、街を行き交う車の9割以上は日本から輸入された中古車です。この3年間で、街中の中古車センターの数も随分と増加したように感じます。

町の周辺にはコンパウンドと言われる中・低所得層の人達が固まって生活するエリアがありますが、ケニアのナイロビにあるようなスラムに比較すると町並みも整然としており、ある程度の電気・水道も整備されているようです。また、この国の国民一人当りの GDP は銅を中心とした鉱物資源のお蔭でこれまで着実に伸びてきており、数年後には2000ドルを超えるだろうとも言われています。首都ルサカを初めて訪問した人は、ルサカの状況や GDP 等の情報から一様に、この国はかなり進んだ国なのだろうという印象を受けると思います。

ただし、ルサカの町を出て地方を訪問するとこの印象は大きく変化します。私はザンビアの北部によく出張しましたが、北部州の州都カサマまでは約 850km、車で約 10 時間の道程です。ルサカの町を離れ北部に向かうと最初の 3・4 時間程の間には前述したセンターピボットや大型スプリンクラーによる灌漑風景が多く見られますが、それから後の車窓からの景色はブッシュの連続で殆ど変わりません。先ず感じるのは、道路沿いの町が非常に少ないこと。ザンビアはその国土の割に人口が少なく(国土は日本の約2倍、人口は約1,500万人)、人口密度の低い国ですが、ルサカを一步出ると道路脇に見える集落は極端に少なくなります。車窓から見える農家の集落は数軒程度で、村も広い面積に広がっているようです。農家の屋根の多くは藁葺きで壁も土壁(場所によっては藁壁)の家が殆どという印象です。勿論、中にはレンガ造りでトタン屋根の家もありますが、とにかく藁葺き屋根の家が多いというのが印象です。ルサカで感じたザンビアは本当にごく一部の都会の人たちの生活だったようです。



西部州の村の様子

私は仕事柄、この国の農業生産に関する情報に触れる機会が多いのですが、この国の農業統計を見て幾つか驚いたことがあります。先ずは、この国がメイズ(トウモロコシ)一辺倒の国であること。この国の人達の主食は、シマと呼ばれるメイズの粉を煮てから練って固形状にしたものですが(ザンビア便り第3回参照)、彼らは年間平均で一人当たり118キロ(2013年FAO統計)のメイズを食べています。この消費量は1950年代に日本人が食べていたコメの量に匹敵しますが、日本ではその後に食の多様化が進み、最近のコメの消費量は一人当たり60キロ程度になっています。次におどろいたのは、メイズ以外の作物の消費量が極端に少ないことです。つまり、ザンビアの多くの人達(特に低所得層)

は栄養のかなりの部分をメイズから吸収しているということです。ザンビアは 2000 年代後半以降、特に 2010 年代には非常に高い食糧自給率を達成していますが、その殆どはメイズでありその他の食用作物に関しては国内で生産される量を分けて食べているという状況が続いています。このため、この国はアフリカの中でも貧栄養が問題となっている国の 1 つで、特に貧困層の女性や乳幼児の貧栄養は大きな社会問題となっています。この国の栄養改善のためには、メイズ以外の作物生産を進めると同時に、食の多様化を推進することが必要不可欠です。私が長く駐在したケニアでもシマに似たウガリを食し、1960 年代から 1970 年代にかけては一人当たり 120 キロ程度のメイズを消費していたようですが、近年では 80 キロを下回っており、メイズ以外に種々の作物の消費量が増えています。

ザンビアでは、食用作物の殆どが小・中規模農家で生産されています。今年の作物生産予想によると、主要食用作物の小・中規模農家による生産割合は、メイズ(93.1%)、キャッサバ(100%)、ソルガム(94.6%)、ミレット(99.7%)、コメ(100%)、サツマイモ(99.1%)、落花生(98.4%)、ジャガイモ(12.6%)、大豆(17.1%)、小麦(0%)となっています。大規模の商業農家が持つセンターピボットの多くでは、小麦、ジャガイモや大豆が生産されているようです。ところで、ザンビア政府の基準では小規模農家は土地所有が 5ha 以下、中規模の家は 5~10ha となっています。5ha 以下が小規模農家となると日本の農家の殆どは小規模農家になってしまいますが、この国の小規模農家の問題は、ある程度の農地を持っていても生産性が低すぎて貧困生活から抜け出せないところにあります。小規模農家の多くは貧困レベル以下の生活環境にあり食糧自給にすら問題のある人たちです。



北部州の農家圃場

この国では都市と田舎、大規模農家と小規模農家の 2 重構造が出来上がっています。この国の農業セクターが発展し、多くの小規模農家の生活が改善されるためにはどのような政策が必要なのかを私なりに考えてみました。農業政策の必要性から考えると、3 つの軸の政策が必要になると思われる。第1の軸は、農家規模に応じた政策・計画の立案です。大規模の商業農家が生産性を上げることで農業セクター全体の引き上げや輸出に繋げることは必要ですが、それだけでは貧困農家の生活は改善されません(当然ながら、商業農家は自分たちの利益優先です)。小規模貧困農家の生活をどうやって押し上げるかの政策が必要不可欠です。ザンビアでは既にそのような政策がありますが、十分に機能していない点が問題です。2 番目の軸は面的な政策の必要性です。この国の面積は日本の約 2 倍ですが、その農業生産環境は、地域によって大きく異なります。当然ながら地域に合った政策が必要で、そのためには地方分権化も必要不可欠な要素です。3 番目の軸は、農業産品毎の政策で、各種農作物、畜産、漁業等の産品毎に政策を提示する必要があります。国民の関心が高いからと言って、何時までもメイズに偏った政策を進めていたのでは農業セクター全体の発展は見込めません。農業産

品の多様化は、農業セクターが発展するためには必要不可欠なプロセスです。この軸には、もう一つ大事なプロセスがあります。それは食の多様化です。日本や多くの他の国が進めてきたような食の多様化を進めることで、政策だけでなくニーズの点からも農業の多様化を進める必要がありますし、国民(特に低所得者層)の栄養改善はこの国にとって喫緊の課題です。食が多様化すればそれだけ農業生産や関連産業にとってのニーズが拡大し、小規模農家を含む農業生産者の活性化に繋がります。戦後の日本では、そのプロセスが経済発展を牽引してきました。したがって、これら3つの軸を3次元的に見ながら農業セクターの開発の方向性を検討し、政策・計画を立案・実行することができれば、小規模貧困農家の生活改善に繋がるのではないかとというのが私の持論です。離任にあたってこういう内容を取り纏めた報告書を作成し、農業畜産省の幹部に説明しました。ザンビアの小規模貧困農家の生活が改善されていくことを切に祈っております。



ザンビアの農民達は歌や踊りで迎えてくれます

(2015年8月14日)